Vol.．240　シャッターのない町～私の見た水郷　佐原～　（平成24年9月25日）

先日の総務財政委員会の視察研修で平成２３年度全国商工会議所「きらり輝く観光振興大賞」を受賞した佐原商工会議所に私も同行させていただきました。

一緒に行かれた方々、それぞれの観点があったかと思いますが、私の目で見た実感をそのまま文とさせて頂きました。佐原のまちの「きらり輝く観光」のあり方に共鳴するものがありましたなら是非実行に生かして下さるようお願いを申し上げます。

佐原には古くから友人が多くおりましたので、昨年の東北大震災の折にはすぐ佐原には見舞に駆けつけました。その折、案内してくれた友人が「今年は『山車』は出せません。山車の通り道の小野川の川岸が崩れて復旧の見込みが立たないから見て下さい。」と無念やる方ない面持ちで話しておりました。しかし、市民あげて復旧され、夏には１０台、秋には１４台の山車が佐原囃子と共に勇壮な曳き廻しが行われたと聞きました。

佐原では「江戸優り」と言う言葉が良く使われますが、江戸の町、江戸っ子に負けない意気込み、誇りが佐原のまちの人々に勇気、結束を与えているのか・・・と畏敬に加えて羨望な思いを強く持ちました。

町並みを歩いて気が付いた事は、シャッターが下りている店が一軒もないので聞いてみますと、この町並みにはシャッターが無いのですと言われました。

なぜ？国の重要伝統的建造物群保存地区で罰則等の規定はありませんが、皆で町の景観を大切に守っております！とあの大震災の恐ろしさを経験したら近代的な店に変えたいと思うはずなのに、佐原の人々は頑固に？江戸優りの景観（共有の財産）として守り合っているのか、中々出来ないことだなぁと暫くは黙ったまま遠くへ続く町並みに佇立しておりました。

古き良きものを大切に継承する、滅びゆく者の美しさ、日本人だけが持つ情緒感かもしれません。

木更津のまちは古くから江戸からの港町であり、江戸前の食べ物、花街、河岸通り、古い商家の並ぶ町、広重や司馬遷が描いた木更津の眺望・・・のイメージ。面影、心象は急速な近代化によって消し去ったからアクアラインを渡ってくる人々は見向きもせず通過していくのかも知れません。難しい時代の変遷、選択であります。

佐原は小見川、山田、栗源町と合併して香取市となり、人口凡そ８万２千人、観光入込人口凡そ５～６００万人、うち、香取神宮に２３０万人、佐原の町の人々は古き良き本物にこだわり、文化、暮らし、町並みを大切にして外に向かっては見栄を張らず、内部の充実、豊かさを築いてきたと言われます。

店の古いガラス戸には手書きの貼紙があり、そこには佃煮、漬物、豆類、ごま油等の商品名がある。古い町並みにはこの貼紙の方が似合うかもと思いました。

佐原の元気なオカミさん会はこの町の苦情処理を一手に引き受けて、ぬくもりを作ってくれている大黒柱とか、佐原の町は大同小異のまちでした。

町が良くなれば、自分たちも良くなると言う、江戸優りの気風が町を支え、商いを繁昌させている大型店が一店もない佐原でした。